歴史点描　54　　龍門寺の池田龍眠句碑

浜田の龍門寺は、不生禅を説かれた盤珪国師の開山による、臨済宗妙心寺派の大寺院である。境内には多くの史跡があるが、その中に網干の俳人池田龍眠の句碑がある。当初は山門を入ってすぐの鐘楼の前にあったそうだが、駐車場の整備のため、現在は山門右の不動堂の東に移転されている。

池田龍眠は荻原井泉水主宰の「層雲」に所属していたが、昭和8年4月（1933）に数え39歳の若さで死去。生前、師弟は会うことはなかったが、昭和8年5月、井泉水が神戸の句会に出席した翌日、龍眠の35日忌の法要に網干の生家を訪れて焼香したようだ。この時井泉水一行は龍門寺にも足を運び、女流俳人の田捨女の墓を訪ねた。その折に「層雲」播磨支部長であった相生の浦山木霊が、井泉水に龍眠の句碑を龍門寺に建てる計画を話したらしい。ちなみにこの浦山木霊は、「キューポラのある街」などの映画監督として名高い浦山桐郎の父にあたる。

翌年昭和9年（1934）11月23日、龍門寺山門近くに句碑が建立され、井泉水をはじめ、40人ほどの関係者が集まり、除幕式が行われた。

「木の葉ふる堂の扉を鎖しゐる」　　龍眠

自筆で刻まれ、石材は香川県広島産自然石で、弟の池田昌夫と浦山木霊が二人で何度も足を運んで、選んだらしい。裏面には「昭和9年11月層雲播磨支部建立」とある。池田昌夫によると龍眠は生前からこの閑寂な龍門寺の境内に句碑を建てたいとの希望を持っていた。

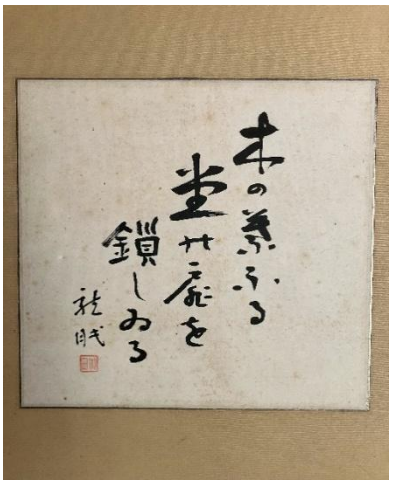
午前中の除幕式の後、午後から記念文芸講演会が本堂で開かれ、詩人竹中郁、歌人安田青風に続いて、井泉水が「俳句に生きる心」と題して龍眠の句について講演した。病俳人としての龍眠は正岡子規以上のものがあると力説した。

この句碑の句は、昭和7年に出した句集「陽を浴びて」には入っていない。おそらく句集出版後に「層雲」に発表したものであろう。なぜこの句を選んだのかは今となっては分からないが、「陽を浴びて」には龍門寺を詠んだ句がたくさんあるので故人も満足しているのではないか。

盤珪忌　「開山の忌日なりけり菊盛り」
龍門寺　「梅の下畑打つ僧のゐたりけり」
　　「朝ぐもり境内寂と掃かれあり」

網干歴史講座会員　浜田　　中川千里

池田龍眠句碑



句碑の元になった色紙
（池田松美さん蔵）

「層雲」平成 15 年 9 月号
句碑建立の経緯が掲載されている